18・9 世紀ドイツの社会経済思想
――ドイツ・ロマン主義の起点と思想構造そして現代的意味

報告者: 高橋優（福島大学）・武田利勝（九州大学）
討論者: 摂津隆信（山形大学）
世話人: 原田哲史（関西学院大学）・大塚雄太（愛知学院大学）

今回のセッションでは、ドイツ・ロマン主義を代表する二人の思想家ノヴァーリス（1772～1801 年）とフリードリヒ・シュレーゲル（1772～1829 年）に焦点をあて、両者の思想構造を考察するとともに、その今日的意義を展望した。

第 1 報告（高橋）:「仲介者」としての「詩的国家」―ノヴァーリスのコスモポリタニズムについて

本報告では、ノヴァーリスの政治思想を「コスモポリタニズム」の観点から捉え、その現代的意義を問うことを目的とした。カントは超感覚的認識を不可能とする一方、超感覚的、神的な法を「永遠平和」の拠り所とする。ノヴァーリスは、超越的な「普遍意志」は認識不可能であり、「フィクション」により表象されねばならないとカントを批判する。「表象（Repräsentation）」は、「代表」を意味する語でもある。ノヴァーリスにとって国家の代表は個人の自我と普遍的自我の相互表象の仲介者の役割を果たすものである。彼はまた、「憲法（Constitution）」に、原義である「体質」という意味を付与する。個人の体質の集合としての国家体制はそれゆえ、拡大された個人とみなされる。個人は国家を仲介者として普遍意志と結びつくことができるゆえに「世界市民」たり得るのであり、また常にそうあることを目指さねばならないというノヴァーリスの主張を本報告において確認した。

さらにノヴァーリスの宗教哲学的エッセイ『ヨーロッパ』を詳細に検討し、彼が求める宗教が既存のキリスト教と根本的に異なるものであることを明らかにし、ヨーロッパ中心主義、キリスト教中心主義的に解釈される傾向が誤解に基づいていることを示した。また、政治的ロマン主義は現実問題を軽視し、詩の題材にしているとの批判についても、そもそもその二分法をノヴァーリスが明確に否定していること、ノヴァーリスの力点が夢想的な未来や理想化された中世ではなく「いま、ここ」にあることを示し、普遍意志と個人の「仲介者」としての国家のあり方を現代に問う意義をフロアに問う形で報告を締めた。

第 2 報告（武田）:「断片的・有機的・発生論的――フリードリヒ・シュレーゲルの思想世界」

本報告では、1790 年代半ばから 1800 年代半ばまでのフリードリヒ・シュレーゲルの思想の特徴を、とりわけ「断片的なもの」「有機的なもの」の二概念に焦点をあてながら説明し、その思想が後期ロマン派における共同体の理念にとっていかなる意味での萌芽と言いうるのか、かつまた、今日的な視点から見た場合にそれがいかなる意義を持ちうるのかにつ

いて考察した。

1790 年代前半を古典文献学研究に捧げたシュレーゲルにとって、「断片的なもの」がまずもって有するのは、一種の考古学的問題性である。「断片的なもの」の全体への再構成という要請は、そのまま、再構成する近代的主体の歴史的反省を促す。対象への眼差しに主体の時間的・空間的立ち位置への内省が重なる時、あらゆる観察は「批評」となる。シュレーゲルは 1798 年の論考『ゲーテのマイスターについて』において、作者・作品・読者のそれぞれをいわば断片と見なし、それぞれが複雑に絡み合う有機的なプロセスを明るみに出すことによって、「批評」が本来持つべき共同体的な性格を指し示した。ここでの各個体（「断片的なもの」としての）の有機的な結びつきは、同時期の政治的論稿『共和制の概念についての試論』、さらには 1800 年の『超越論的哲学』講義においてはっきりと明言された共同体理念に通底するものであり、また、シュレーゲル独自の「体系」概念を支えるものでもある。本報告では彼の体系＝共同体概念の持つ植物的性格を、カント的体系＝共同体概念と対比させつつ考察した。

討　論

討論者（摂津）からの質問は以下のようであった。

第 1 報告に対しては、①「永遠平和という理想は歴史の果てに存在するのみならず、『フィクション』を通じて『いま・ここ』において象徴的に体験され得る」という結論はオースティンに端を発しエリカ・フィッシャー=リヒテによって深化させられた《パフォーマティブ》の理念を想起させる。ノヴァーリスの創作活動において、「いま・ここ」を共に生み出す「共同主体（Co-Präsenz）」としての市民を生み出す具体的な試みはあったか？②ノヴァーリスは国家も世界も「大いなる人体」とみなしている。その人体は、理性や意志で統御可能な「身体（Körper）」なのか、それともその生命維持と不可分であり感性や本能に抗うことのできないいわば動物的な「肉体（Leib）」のどちらであるのか？人間の体自体は「身体」でもあり「肉体」でもあるが、政治（学）的視角から見た場合、そのような二重性は許容されるものか？報告者は①に関し、ノヴァーリスは作品が有する仲介者的役割を中世・現在・未来という枠組みにおいてつねに意識していたとし、期待と実現からなる未完の『青い花』を一例に挙げて説明した。②については、ノヴァーリスは「Leib」も「Körper」も両方用いている。「Körper」に関しては「身体」のみならず「物体」「立体」という意味も含まれ、物理的存在としての人間が念頭にある。「Leib」には官能的意味が付与されており、理性の枠に収まらない人間存在が想定されている。ノヴァーリスにおける身体としての国家はその両者を統合する形で構想されるものであると説明がなされた。

第 2 報告に対しては、①シュレーゲルは「道徳」をどのように考えていたのか？カントは『世界市民的見地における普遍史の理念』において、科学技術を礎とするフランス文明に対して、道徳に基づくドイツ的「文化」の意義を強調した。シュレーゲル兄弟やノヴァーリスを始めとするロマン主義文学者たちの「体系」「断片」「植物的生長」といった理念が根を張

っている場所は「文化（Kultur）」とみなしてよいか？②「人間の共同体が存在するべきである。あるいは自我は伝達・共有されるべきである。」という刺激的なアフォリズムについて、ここでの伝達と共有の違いは何か？伝達においては「主・客」が明確に区分されるはずだが、「自我の共有」と言ったときそのような主・客関係は解消されているように思われる。ノヴァーリスが述べたような「仲介者」の理念を超えて、「共同主体」が常に生まれては刷新されるパフォーマティブな時空が形成されていると考えることが可能か？①に関して報告者は、カントとは異なって、植物的繁茂は Leben に根差すことを指摘した。②については、「断片」を担う作者および読者の媒介に基づく有機化プロセスを強調し、これによって伝達・共有の場としての共同体や社会が、討論者の指摘するパフォーマティブな空間的性格を備えうるとした。

フロアとの討論においては、20 世紀における「断片」と「全体性」の評価、ベンヤミンを視野においた場合の両思想家における「言語」の捉え方、さらには両者における「社交」の位置づけやロマン主義と新自由主義の関係にまで議論が及んだ。参加者は 20 名程度であったものの、報告者、討論者との活発な議論が交わされた。

以上